様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２４６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０１２

研究課題名（和文）医学哲学を構築するための基礎づけとなるハイデガーの行為概念についての研究

研究課題名（英文）A Study of Heidegger's Concept of Action to lay the Foundation for a Construction of Medical Philosophy

研究代表者
池辺　寧（IKEBE, Yasushi）

奈良県立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：００２９０４３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究ではまず、ハイデガーが科学を実存の仕方の一つと捉えている点に着目し、彼は科学の根底には哲学が存していなければならず、研究者が自らの専門分野に即して哲学することに自覚的にならなければならないと考えていたことを論じた。次に、現存在（人間）の存在が気づかいであるがゆえに、現存在の行為は可能になるとハイデガーは考えていた点に着目し、彼は身体に対する気づかいの優位を説いていたことを指摘した。さらに本研究では痛みや自然災害を主題にして、高度に技術化した現代社会にあっても人間には制御しえないものと人間との関係について考察した。

研究成果の概要（英文）：　In this study, first, I dealt with Heidegger's existential conception of science. Heidegger thought that science must be founded on philosophy and every scientist must philosophize about his/her own specialized field. Secondly, I treated the relation of Heidegger's Sorge (care) to body. I showed that Heidegger thought about the primacy of Sorge. Because the being of Dasein (human being) is Sorge, and Sorge enables Dasein to act. In addition, I selected human pain and natural disaster for the theme of this study. They cannot be controlled even by modern technology. I argued how human beings should cope with them.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ハイデガー　哲学　科学の実存論的概念　医学　気づかい　身体性　痛み　自然災害

１．研究開始当初の背景

ハイデガーは様々な学問分野に影響を与えた哲学者であり、医学の分野においても例外ではない。ハイデガー自身は医学のあり方を主題的に論じることはなかったが、かつては特に精神医学者たちのなかに、ハイデガーの影響を受けながら、自らの医学を確立していった人たちがいた。今日では、看護理論の研究において、ハイデガー哲学を援用した理論の構築が試みられている。だが、ハイデガー研究に携わる哲学・倫理学の研究者が、ハイデガー哲学に立脚して医学のあり方を主題的・体系的に論じた研究はあまり見当たらない。それどころか、特に今日の日本においては、生命倫理学や医療倫理学、あるいはケアの現象学の研究はさかんになされているが、医学哲学はあまり論じられない傾向にある。

本研究はこうした状況を踏まえ、医学哲学を構築するための基礎づけとなりうることをめざして、ハイデガー哲学における行為概念の研究を行うものである。

２．研究の目的

本研究の目的は大きく二つに分けられる。第一の目的は、ハイデガーによる存在の思索を行為論として読解することである。近年、他者との相互共同性や実践的な事柄に対するハイデガーの関心が明らかになりつつある。本研究では、このことに着目し、ハイデガーにおける行為概念の重要性を提示することが第一の目的である。第二の目的は、ハイデガーの行為概念から導出される行為の本質や人間の本質に、医学の本質を問う医学哲学を構築するための思想的基盤を見出していくことである。第二の目的では、ハイデガー哲学の医学哲学への応用を試みることにより、高度に技術化した現代社会に求められる人間のあり方を考える。

３．研究の方法

(1)　前期ハイデガーの中心的な主題の一つであった基礎的存在論は、個別諸科学を存在論的に基礎づけていくことを目論んだものである。ハイデガーは科学を実存の仕方と捉え、それを「科学の実存論的概念」と名づけ、学問論（科学論）を展開している。特に『哲学入門』（1928/29 年冬学期講義録）では、哲学と科学の関係などを主題的に論じている。

本研究では『存在と時間』や『哲学入門』などにみられる学問論を手がかりにして、ハイデガーによる存在の思索を行為論と解釈することの妥当性を明らかにする。そして、この試みを通じて、存在の思索は一見現実から遊離しているように見えるが、人間の生存に密接に関わっていることを明らかにする。

(2)　ハイデガーは身体の問題について、それを語る意義を認めつつも主題的に論じることをしなかった。だが、ハイデガーは『ツォリコーン・ゼミナール』やその他の講義録などにおいて随所で、断片的であるにせよ、身体について言及している。身体は行為の起点であるが、行為が可能になるのはハイデガーに従えば、現存在（人間）の存在が気づかいだからである。本研究では、身体を気づかいとの関係から捉え直す。

(3)　痛みの除去・緩和は医療の原点に位置づけられる医療行為である。しかし一方で、痛みはハイデガーも言うように、人間存在に深くかかわる根本動向である。痛みの問題は今回の研究課題に取り組む以前から継続的に取り組んでいる主題である。研究成果もすでに公表しているが、既発表論文をもとに人間における痛みの問題の研究に改めて取り組む。

(4)　哲学や倫理学の分野では、自然災害が主題になることはほとんどない。環境倫理学においても、問題になっているのは人間の行為が自然に及ぼす影響であって、自然災害のように自然が人間の生活に及ぼす影響のことではない。しかし、自然災害のことを看過したまま、自然と人間の関係、および、技術と人間の関係を十分に考えることはできない。大災害に見舞われると、科学技術の限界、他者との関わり、死などの問題に自ずと向き合わざるをえなくなるからである。本研究では、これらの問題を考察する。

４．研究成果

(1)　科学的研究は人間が取りうる態度の一つである。しかし、科学的研究は人間の唯一の存在様式でもなければ、最も身近な存在様式でもない。一方、哲学することは人間の根源的な行為である。「あらゆる科学は哲学に根をもっており、哲学からはじめて生じる」。ハイデガーはこのように考え、科学を哲学的・存在論的に基礎づける。

ハイデガーが科学を哲学的・存在論的に基礎づけようとするのは、科学に危機が生じているからである。ハイデガーは科学の危機として、次の三点を指摘する。第一に、科学の専門化・細分化が進むにつれ、大学における科学的研究の営みに柔軟性が失われている。そのことにより、個々の研究者にとっての「科学の実存的位置」が不確かなものになり、個々の研究者は科学にいかに関わるべきか、科学的研究はその研究者にとっていかなる意味があるのか、これらのことが曖昧なままになっている。第二に、何のために科学的研究を行うのかが曖昧になっている。一般に科学は真理の探究をめざす知的な営みと理解されているが、何のために真理の探究を行うのかと言えば、真理のための真理の探究にとどまらず、社会や日常生活への還元が見込まれるからである。ところが、今日、科学の実践的性格が曖昧になっている。ハイデガーは一例として医学を取り上げ、若い医師たちは

医学的知識をもっているが、医師とは何であるかがわかっていないと批判する。第三に、人間の実存における科学の役割や可能性などが解明されないかぎり、いつの時代にあっても科学は危機にある。危機は科学に必然的に存している事態である。それゆえ、ハイデガーは科学を哲学的・存在論的に基礎づけようと試みるのである。

ハイデガーは科学を基礎づけるにあたり、科学の存在論的な発生に着目し、対象化ないしは主題化という語で科学を特徴づけた。対象化とは、当該科学が対象としている事物がそれ自身において現れることへと態度を切り替えることである。つまり、事物の性質や状態などを明らかにしたり、その事物がもつ可能性を探ったりすることによって、事物が自らをあらわにする機会をつくりだすことである。ハイデガーはこうした行為を原行為と呼ぶ。原行為とは、存在者を存在させることである。なお、対象化が可能になるのは、事物に対する存在了解が変化したからである。存在了解が変化することによって、存在者は科学的な研究の対象として照らし出され、研究の主題となる。

本研究ではハイデガーの所論を手がかりにして、医学における主題化の問題を取り上げた。医学は、身体を物体化することにより、身体を主題にするが、人間の身体を単なる物体とみなすことはできない。それゆえ、医学においては、主題化それ自体がすでに弊害をはらんでいる。本研究では、医学における主題化の弊害として、トゥームズに依拠して次の三点を指摘した。第一に、医師と患者のあいだでの病気に対する主題化の相違が両者の見解の相違を生んでいる。第二に、患者は自らの身体が物理的な身体と受け取られたことによって、非人間的に扱われたように感じる。第三に、患者は自らの病気が主題化されことによって、自らを検査や治療の対象とみなすようになり、医師に依存せざるをえなくなる。

ところで、ハイデガーによれば、人間の根本体制にもとづいて把握されていない科学の定義は本質的に役に立たない。科学を定義するためには、人間は科学とどのように関わっているのかが問われなければならない。一般に科学の目的は真理の探究とみなされているが、問題は真理とは何かである。ハイデガーは真理のありかを現存在（人間）のうちに求める。彼はこう考えることにより、科学もまた現存在の実存に属しているとみなす。といっても、すべての現存在は科学に従事しなければならないわけでも、科学的な真理は科学以前の真理より優れているわけでもない。科学は、科学以前の現存在によって根拠を与えられる、現存在の自由な可能性の一つにほかならない。今日の現存在は科学以前の態度をとっているときであっても、科学的な物の見方による制約を受けており、科学的な現存在である。そこでハイデガーは「科学の実存論的概念」という語を提示し、科学のあり方を問う。

対象化・主題化という科学的態度を可能にしているのは、存在の先行的な企投である。ハイデガーはこの企投を、現存在の原行為とみなす。原行為とは存在者を存在させることであるが、存在させることは存在者に対するあらゆる態度のうちに存している。ハイデガーは「存在の先行的な企投において、われわれは前もって常にすでに存在者を超えている」と考え、「存在者を先行的に超えること」を超越と名づける。

科学が存在者を対象化・主題化するとき、存在者は眼前に置かれたものとしてあらわになっており、そのことによって、われわれは存在者をそれ自身において認識できる。科学的認識とは置かれたもの（positum）としての存在者を認識すること、つまり、実証的な（positiv）認識である。科学の実証性を可能にするのは存在者を存在させること、つまり、現存在の原行為であるが、現存在の原行為とは超越することである。というのも、われわれが存在者を先行的に超えていることによって、存在者は存在者としてあらわになり、われわれは存在者と関わることができるようになるからである。しかも、超越を明確に生起させることにおいて、現存在は本質的になる。このことは存在そのものを明確に問うことであり、とりもなおさず、哲学することにほかならない。それゆえ、超越することは哲学することであり、現存在の原行為とは哲学することを指しているといえる。

科学とは存在者の認識であり、認識される存在者の領域は画定されており、存在者全体に関わることはない。科学はあくまで個別科学であって、一般科学といった学は存在しない。存在者全体を問うのは哲学である。したがって、科学が存在者全体へと立ち返り、存在者の真理を問おうとするならば、哲学的にならざるをえない。科学が哲学的になることで科学を基礎づけることができるが、科学が哲学的になるといっても、科学的研究に従事する者が研究のかたわらで、研究に加えて哲学するのではない。ハイデガーは科学を実存の仕方として捉え、「科学の実存論的概念」を説くが、そこで彼が考えているのは、研究者各自が自らの専門分野に即して哲学することに自覚的になることである。

(2)　ハイデガーは気づかいという術語でもって、現存在（人間）はいかに存在しているのかを特徴づけた。ハイデガーによれば、現存在は常に自己を超えて、他者や事物を気づかっている存在である。気づかいの原語は Sorge であるが、英語では care と訳される。そのため、ハイデガーの気づかい概念を手がかりにして人間をケアする存在と捉え、看護ケアのあり方が論じられることがある。だが、気づかいとは、常に何かに関わっているという現存在のあり方を言い表している存在論

的構造概念であって、看護ケアはその一つの形態にすぎない。その点を適切に理解しておかないと、ハイデガーが言う気づかいを手がかりにしてケアを論じる試みは、ペイリーが指摘するように失敗するように運命づけられていると言わざるをえない。

現存在が他者や事物に関わろうとすれば、どんな行為であれ、身体的な振る舞いが必然的に伴う。身体は行為の起点である。身体がなければ現存在の生や行為はありえない。そのかぎりでは、身体が生や行為を可能にしている。現存在の存在は気づかいであるのは、現存在は身体的な存在だからである。ところが、ハイデガーはこのようには考えず、身体に対する気づかいの優位を主張する。彼に従えば、現存在の行為が可能になるのは現存在の存在が気づかいだからである。ハイデガーに依拠してケアを論じる場合も、身体に対する気づかいの優位を押さえておく必要がある。

ハイデガーは身体の問題について、それを語る意義を認めつつも主題的に論じることをしなかった。彼は気づかいと身体の関係も明確には論じていない。そこで本研究では、ハイデガーが主張する気づかいの優位を論証するために、気分、自然、道具、人間の振る舞いと動物の行動の関係などの観点から研究に取り組んだ。そして、それを手がかりにして、医療における身体の問題を考察することを試みた。

(3)　患者と医療者（特に医師）のあいだで交わされている対話は、医学の声と生活世界の声に分類することができる。医学の声とは、医学的知識や技術を前提にした対話である。医学の声のもとで語られるのは、病因や病態、治療の可能性や選択肢、あるいは、既往症や現病歴などである。一方、生活世界の声とは、患者による病気の説明や解釈、あるいは日常生活への影響などをめぐる対話である。生活世界の声のもとで語られるのは、患者のわが身に起きた出来事である。

従来の医療の問題点は、医療者は病態を理解し、治療を行うことには熱心に取り組んでも、患者の主観的な体験を理解することにはあまり注意を払っていない点にある。つまり、患者を病む主体・痛む主体としてではなく、もっぱら検査や治療の対象（客体）と捉え、医学の声にしか耳を傾けていない点にある。

十全な医療を実現するためには、医療者は医学の声だけでなく、患者の生活世界の声も同時に聴く能力を身につける必要がある。とりわけ、痛みのような数値化・可視化できない体験の場合は、患者のあやふやな言葉を通じて患者の体験を理解し解釈できる技能が医療者に求められる。

(4)　自然災害を主題とする研究は、本研究の課題から少しずれる。しかし、病気や死、自然災害といった人間には制御しえないものと人間との関係、および、技術と人間との関係を問うという点においては通底している。高度に技術化した現代社会に求められる人間のあり方を考えようとする本研究課題と問題意識そのものは密接に重なっている。

今日、防災意識の高まり、防災対策の強化、災害医療能力の向上、等々によって、災害による被害の規模は以前よりも小さくなっている。しかし同時に、対策を考えるうえでは、文明が進んだがために、かつては考えられなかった甚大な被害が生じることも十分に考慮する必要がある。科学技術を駆使して十分な対策を講じても、人間は自然災害から免れることができない。科学技術は万能ではなく、自然を制御し支配することは不可能である。それゆえ、自然災害とともに生きるうえで重要なのは、自然の威力を畏怖し人間の無力さを自覚することである。

大災害に見舞われ、他からの支援を受けざるをえない事態に陥っても、支援を拒んでしまう人たちがいる。支援を受けることに引け目を感じ、支援を拒んでしまうのである。しかし、生存が脅かされている状況のなかで支援を求めることは、社会に要求できる正当な主張であり、恥じるようなことでは決してない。われわれは誰しも受援者にも支援者にもなりうる存在である。

自然災害が日常とは区別される異常な事態であるのは一つには、突如として死に直面せざるをえないからである。しかも、場合によれば、無残な仕方で死と向き合わざるをえないからである。死と向き合うといっても、災害において死者のことを切実に思うのは家族だけかもしれない。しかし、このことを不謹慎と非難することはできない。われわれはどうしても自分を起点にしてしか、物事を考えることができないからである。死者のことを思うのは家族だけであっても、また、いずれは誰もが生きたことの痕跡すらなくなるにしても、一回かぎりの独自な生を生きたことは否定できない。誰しも唯一無二の存在として存在したのであり、その意味で、尊い命をもった存在である。「尊い命が失われた」という言い回しは見慣れた決まり文句になっているが、この言葉がもつ重みを顧みることなく災害について考えることはできない。

(5)　以上のように本研究では、学問論（科学論）、身体論などの観点からハイデガーの行為概念の解明に努めた。一定の研究成果を挙げることができたが、十分とはいえない。今後も同じ問題意識のもとで研究を継続的に実施していくとともに、ハイデガー哲学を手がかりにした医学哲学の構築へと研究を発展させていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 池辺　寧「災害とともに生きる―来たる「明日」に向けて―」、『ぷらくしす』（広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター）、査読有、19 号、2018 年、19-31 頁。

② 池辺　寧「ハイデガーにおける哲学と科学―『哲学入門』を手がかりにして―」、『HUMANITAS』（奈良県立医科大学教養教育紀要），査読無、42 号、2017 年、1-19 頁。
http://hdl.handle.net/10564/3307

〔学会発表〕（計７件）

① 池辺　寧「災害とともに生きる―来たる「明日」に向けて―」、第 24 回広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会、2018 年。

② 池辺　寧「ハイデガーにおける気づかいと身体性」、第 13 回行為論研究会、2018 年。

③ 池辺　寧「ハイデガーの現象学と看護理論」、奈良県看護師等学校教務主任協議会研修会、2017 年。

④ 池辺　寧「痛みと人間」、臨床ケア哲学・倫理学セミナー（日本医学哲学・倫理学会）、2017 年。

⑤ 池辺　寧「自然と人間―災害とともに生きる―」、第 49 回広島倫理学会、2016 年。

⑥ 池辺　寧「ハイデガーの現象学とは何か」、臨床ケア哲学・倫理学セミナー（日本医学哲学・倫理学会）、2016 年。

⑦ 池辺　寧「ハイデガーの学問論―1928/29 年冬学期講義録『哲学入門』を手がかりにして―」、第 48 回広島倫理学会、2015 年。

〔図書〕（計２件）

① 池辺　寧（共著）『環境による健康リスク』、診断と治療社、2017 年、40-43 頁。

② 池辺　寧（共著）『看護職・看護学生のための「痛みケア」』、ピラールプレス、2017 年、７-32 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

池辺　寧（IKEBE, Yasushi）
奈良県立医科大学・医学部・准教授
研究者番号：００２９０４３７

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし